

第1部 楽しみの神聖なる根源

コミッサオン・ヂ・フレンチ 「当日発表」

(「黒人の王・女王の戴冠祭り」ーベッチ・カルヴァーリオ、ジョルジ・アラガオンらが搭乗)

振付 ジャイミー・アローシャ

ムーザ・ダ・エスコラ ホベルタ・アプラチーとシェイラ・カルヴァーリオ

第1山車(アプリ・アラス) 「私はカシーキ、私はマンゲイラ」

マンゲイラおよび今回の顕彰対象であるカシーキ・ヂ・ハモスのシンボルであるスルドとインディオが一つになって、緑とピンクの夢を新しいサンバの殿堂へといざない、楽しみを運ぶ。

デスタッキ(中央・上) ナビウ・ハビッピ

第2部 小さなカーニバル

第1アーラ 「エントルードにのって」

第1 共和制に移行する前、植民地時代のリオには、カーニバルの中心的見世物として、ポルトガルからもたらされたエントルードがあった。

第2アーラ 「リマオン・ヂ・セーラ」

エントルードが行われている最中、リマオン・ヂ・セーラ(中に粉や液体を仕込んだ蠟製の球)を売る人の姿は、デブレーの絵にも描かれている。やがて、リマオン・ヂ・セーラが相手に投げつける「武器」として使われるようになり、上流階級の人々もそこに参加した。

第3アーラ 「花売り」

リオデジャネイロには花を売り歩く女性たちがいたが、彼女たちも、仕事を放りだしてエントルードに参加していた。

第4アーラ 「香水」

1885年頃、投擲物の内容が従来の悪臭がする液体から香水に変わり、エントルードの楽しさや親しみやすさが増した。

第5アーラ 『クンビー族』のインディオたち」

20世紀の初頭、クンビース(「クンビー族」)と名乗った黒人のグループがインディオの扮装で練り歩き、やがてコルダオンに分類されるようになった。

第6アーラ「マラカトゥの王たちと女王たち」

生まれ故郷のアフリカを思い、カーニバル期間に黒人たちは行列を作り、マラカトゥの王と女王の戴冠式を行った。式はチア・シアータの家の前で行われた。

第7アーラ「コルダオン・ホーザ・ヂ・オウロ」

シキーニャ・ゴンザーガは、1889年に、コルダオン・ホーザ・ヂ・オウロを見ながら、マルシャ曲『オー・アブリ・アールス(ほら、道を開けて)』を作った。

第8アーラ「ハンショ・ホーザ・ブランカ」

ホーザ・ブランカは、1873年のカーニバルに登場したりオデジャネイロで最初のハンショであり、この時代に最も高い人気をほこったグループの一つである。

第9アーラ(バイアーナス)「イアオーたち——チア・シアータ礼賛」

チア・シアータ・ドシュンはプラッサ・オンゼのチア・バイアーナたちの中でも、最も行動力があり、最も有名な存在だった。「聖人の母」職を務め、大いに尊敬された彼女こそが、伝統的なオリシャーの神々をまつる儀式を大きなイベントへと変革させた功労者である。

ミュージズのペア クライトンとルシアーナ G5

第2山車「プラッサ・オンゼ——チア・シアータの小アフリカ」

チア・シアータを称えて行われた、アフリカ宗教系の太鼓と祭り。往時、路面電車は、伝統的な装束に身を包んだ人々を満載して市街を走り回っていた。

DESTACQUE(右) ベニー

DESTACQUE(左) ファビオ・リーマ

第3部 大いなるカーニバル

第10アーラ「上流階級の舞踏会」

エントルードとして知られるカーニバルの遊びを離れて、ヨーロッパから採り入れられた舞踏会が新興ブルジョア層を熱狂させ、またパリ風の祭りの洒落たスタイルが盛り込まれるようになった。

第11アーラ「ピエロの魅力」

ピエロは、リオデジャネイロの舞踏会で多くみられる、イタリアのコンメディア・デラルテのキャラクターである。

第12アーラ「仮面を着けたアルレキン(ハーレクイン)」

アルレキンは、リオデジャネイロの舞踏会で多くみられる、イタリアのコンメディア・デラルテのキャラクターである。格好よく、詩的である。

ミュージズのトリオ ホゼマリー、インディオ、ジュリアーナ

第13 アーラ(女性パシスタ)「艶めかしいコロンビーナ」

リオデジャネイロの舞踏会で多くみられる、コンメディア・デラルテのもう一人のキャラクター。コロンビーナはピエロとアルレキンを夢中にさせる。

バテリア 「当日発表」

(「カシーキ・ヂ・ハモス vs バッフォ・ダ・オンサ」——前がインディオ、後がジャガーな衣装)

第3 山車 「当日発表」

(「パゴージのゆりかご」——ルイジート、ドウドウ・ノーブリらが搭乗)

ミュージズのペア カレンとレアンドロ・ド・パンデイロ

第14 アーラ(男性パシスタ)「サンバの上流階級」

リオデジャネイロの上流階級は、路上の大騒ぎを批判しつつ、機会があればカーニバルを祝う。

第15 アーラ 「民主主義者たちの大いなるカーニバル」

1855年、祭り好きの上流階級がヨーロッパ風のイベントを立ち上げた。「グランヂ・ソシエダーヂ(大社交界)」と呼ばれる組織を作り、クルービ・ドス・デモクラチコス(民主主義者クラブ)等を集まって、行列パレードを始めた。

第16 アーラ 「フェニアンたちの大いなるカーニバル」

クルービ・ドス・フェニアーノス(フェニアンズ・クラブ)もまた、ブルジョアが集まって行列パレードを行った場所である。

第17 アーラ 「悪魔の代理人たちの大いなるカーニバル」

クルービ・ドス・テネンチス・ド・ヂアーボ(悪魔の代理人たちのクラブ)もまた、グランヂ・ソシエダーヂのひとつだった。

ミュージズのペア アンドレッサとセウゾ

第4 山車 「リオデジャネイロの上流階級のお祭り騒ぎ」

19世紀末から20世紀初頭の上流階級のカーニバルを表現する。

デスタッキ(中央・上) エドゥアルド・レアウ

デスタッキ(中央・下) サンチーニョ

第4部 神聖な祝祭の世俗的な側面

第18 アーラ「ブロッコ・マカッコ・サービ・サービ・ホンペウ・サンバ」

ペーニャの祭りは、カーニバルに次ぐリオデジャネイロ第2の一大イベントだった。マカッコ・サービ・サービ・ホンペウ・サンバのようなブロッコが登場し、祭りを盛り上げていた。

第19 アーラ「ハンショ・ア・フロール・ダス・マヘッカス」

やがて、フロール・ダス・マヘッカス等のハンショがとめどなく練り歩くようになった。

第20 アーラ「貴婦人とマランドロ」

混血の女性たちやマランドロたちがパーティ用の扮装で繰り出して、祝祭の世俗的な部分を満たしていった。

第21 アーラ「コンガーダ」

ペーニャの祭りではコンガーダも披露された。黒人たちはアフリカの王や女王を偲んで歌い、踊った。

第22 アーラ(クリアンサス)「巡礼の小天使」

祝祭では、天使の扮装をしてペーニャの聖母に祈る巡礼の列に続く子供たちの姿も見られた。

第23 アーラ(バイアニーニャス)「ペーニャの祭りの炊き出し隊」

プラッサ・オンゼからやってきたチア・バイアーナたちがチア・シアータの指示のもとに用意した料理の香りがあたりに漂っていた。

第24 アーラ(作曲部、ヴェーリャ・グワルダ・ダ・パテリア)「シニョー、サンバの王」

ペーニャの祭りで披露された曲が、カーニバル時期に大ヒットとなるなど、ペーニャの祭りはカーニバルに向けての予告的な位置づけでもあった。サンバの王、シニョーによるサンバのリズムが人々を揺さぶっていた。

ミュージズのトリオ アマンダ、クラウチエーニ、フラーヴィア

第5 山車「ペーニャの祭り、サンバの祭り」

ペーニャの祭りをはじめとする、ペーニャ教会の周辺で行われていた伝統的な祝祭では、料理の屋台が名物だった。コルダオンやブロッコが手拍子に合わせて練り歩いた。打楽器の使用が禁止されていた時期の話。

デスタッキ(中央・上) ターニア・インディオ・ド・ブラジル

第5部 ブロッコが何世代にもわたって祭りの参加者たちを盛り上げる

第 25 アーラ 「ブロッコ・カサドーレス・ヂ・ヴェアードス」

ジャーナリストのセルジオ・カブラウによると 1930 年に設立された、最も古いブロッコのひとつ。このブロッコでは、同性愛者を取り締まる警察のやり方を批判するスタイルのマダム・サタンが大ヒットとなった。

第 26 アーラ 「ブロッコ・ピラータス・ド・アモール」

数あるブロッコの中の「お笑い担当」的な位置を保ちつつ、ピラータス・ド・アモールはお祭り騒ぎの中で愛の価値を説き続けた。

第 27 アーラ 「ブロッコ・グワラニース・ダ・シダーヂ・ノーヴァ」

我らが路上のカーニバルの主要登場人物のひとつであるインディオに着想を得て、それをシンボルとして設立されたのが、ブロッコ・グワラニース・ダ・シダーヂ・ノーヴァである。

第 28 アーラ 「ブロッコ・デイシャ・ファラール」

デイシャ・ファラールは 1928 年に、設立者イスマエウ・シウヴァが住んでいたフーア・ド・エスタシオ 27 番地の家の地下室で設立された。このブロッコは現在のエスコラ・ヂ・サンバ・エスタシオ・ヂ・サの前身である。

第 29 アーラ 「ブロッコ・ヴァイ・コモ・ポーヂ」

1931 年に設立されたブロッコ・ヴァイ・コモ・ポーヂは、1934 年のグレミオ・ヘクレアチーヴォ・エスコラ・ヂ・サンバ・ポルテラ設立の基礎となった。ポルテラの青と白の旗はヴァイ・コモ・ポーヂから引き継いだものである。

第 30 アーラ 「ブロッコ・ドス・アレンゲイロス」

1927 年に、ゼ・エスピングーラ、カルトーラ、カルロス・カシャーサらによって設立されたブロッコ。やがてエスタサオン・プリメイラ・ヂ・マンゲイラが芽吹く種子である。

第 31 アーラ 「ブロッコ・ボエーミオス・ヂ・イラジャー」

ボエーミオス・ヂ・イラジャーのようなエンバーロ(路上パレード)のブロッコは、リオデジャネイロの

カーニバル中の遊び方の中で最も一般的な形であったブロック・ヂ・スージョスの直接的な後継者であり、短めのサンバのヒット曲を歌う。

第 32 アーラ 「ブロック・バッフォ・ダ・オンサ」

1956 年のバッフォ・ダ・オンサ設立をもって、ブロックのサンバ、あるいは、エンバーロのサンバ成立の起点とみなすことができる。1 万人近くの大集団がそのサンバに声を合わせるようになった。

第 33 アーラ 「ブロック・カシーキ・ヂ・ハモス」

カシーキの最初のパレードは 1961 年のことで、ハモスを出発して、ボンスセツソおよびオラーリアに至るものだった。後に、規模を拡大し、アヴェニーダ・プレジデンチ・ヴァルガスまで進出し、インディオの扮装をした 1 万人の集団を率いるようになった！

ミュージズのトリオ ダオン、アンデルソン、ハファエーラ

第 6 山車 「バッフォ・ダ・オンサ vs カシーキ・ヂ・ハモス: 喜びの決闘」

何十年にもわたって、カシーキ・ヂ・ハモスとバッフォ・ダ・オンサは、リオデジャネイロの路上カーニバル分野での 2 大勢力だった。

第6部 人々が歌う喜びを失うことはない

第 34 アーラ 「カシーキ・フチボウ・クルービ」

カシーキ・ヂ・ハモスのサンバは、同地で行われていたサッカーの試合後のホーダ・ヂ・サンバを起源としている。

第 35 アーラ 「アグア・ナ・ボカ(唾液分泌)」

アジウド・メンヂス作曲の、カシーキ・ヂ・ハモスの 1963 年のパレード用のサンバ。

第 36 アーラ 「シネーロ・ノーヴォ(新しいビーチ・サンダル)」

ジョアオン・ノゲイラとニウチーニョ・トリステーザ作曲の、カシーキ・ヂ・ハモスの最も有名なサンバ。

第 37 アーラ 「コイジーニャ・ド・パイ(パパの宝物)」

アウミール・ギネート、ルイス・カルロス・ダ・ヴィラ、ジョルジ・アラガオン作曲の、カシーキ・ヂ・ハモスのサンバ。

第 38 アーラ 「カシーキとマンゲイラ」

グルーポ・フンド・ヂ・キンタウ作の、カシーキ・ヂ・ハモスおよびその後見エスコーラであるエスタ
サオン・プリメイラ・ヂ・マンゲイラを称えるサンバ。

第 39 アーラ 「ドーセ・ヘフージオ(甘い隠れ家)」

ルイス・カルロス・ダ・ヴィラ作曲の、カシーキ・ヂ・ハモスのサンバ。

第 40 アーラ 「カマラオン・キ・ドルミ(眠るエビ)」

ゼッカ・パゴデーニョ、ベト・セン・ブラッソ、アルリンド・クルース作曲の、カシーキ・ヂ・ハモスのサ
ンバ。

第 41 アーラ 「ヴォウ・フェステジャール(私は祝う)」

ジョルジ・アラガオン、ヂーダ、ネオシ・ヂアス作曲の、カシーキ・ヂ・ハモスのサンバ。

ミュージアのトリオ ルイス・フェリッピ、グラウシーア、マリオ

第 7 山車 「タマリンドの木とカシーキ・ヂ・ハモスのパゴージ」

聖なるタマリンドの木とパゴージがある、そして伝統のインディオたちが取り囲む、カシーキ・ヂ・ハ
モスの本部。

デスタッキ(中央・上) ジョゼ・ネット

デスタッキ(右) ヒカルド・フェハドール

デスタッキ(左) アラン・タリヤール

第7部 喧噪に境界なし

第 42 アーラ 「宇宙のマランドロ」

1997年、NASA 所属のブラジル人エンジニアであるジャケリーニ・リラによって、マーズ・パスファ
インダー計画のロボットの火星での起動用トリガーとして、サンバ曲「コイジーニャ・ド・パイ」がプロ
グラムに組み込まれた。後に、アウミール・ギネートが、アルリンド・クルース、ソンプリーニャ、シェ
リーフィとともに、サンバの火星の地への到着を表現した「サンバ・ヂ・マルチ(火星のサンバ)」を
作曲した。

メストリ・サーラとポルタ・バンデイラ(第 3 ペア)

ヴィトーリアとマテウス

「火星のサンバ」

第 43 アーラ 「惑星間パシスタ」

「サンバ・ヂ・マルチ」では、火星の地にサンバが到着したことが表現されているが、我らがカーニバルの伝統的な役職であるパシスタもそこから漏らすわけにはいかない。

第 44 アーラ 「銀河のインディオ」

我らがカーニバルの伝統的なキャラクターであるインディオも、この宇宙計画から漏らすわけにはいかない。

第 45 アーラ 「宇宙の海賊」

我らがカーニバルの伝統的なキャラクターである海賊もまた、火星へと向かい、、、

第 46 アーラ 「火星のサンバ」

お祭り騒ぎが火星の大地を支配し、喜びと勝手さが宇宙空間を占める： サンバには境界など似合わない。

第 47 アーラ 「火星の道化師」

道化師たちも、火星上のサンバという宇宙計画に参加する。

第 48 アーラ 「火星のサンバ・ダンサーズ」

サンバ嫌いに善人はいない！ そうでなければ、頭がおかしいか、脚が悪いかだ。したがって、火星人たちまでもサンバにはまり、祝う。

第 49 アーラ 「火星のネガ・マルーカ(狂った黒人女)」

アウミール・ギネート、アルリンド・クルース、ソンプリーニャ、シェリーフィが作った「サンバ・ヂ・マルチ」では、サンバの火星の地への到着が表現されている。ネガ・マルーカもこの計画に参加する。

ミュージズのトリオ エヴェリン、ヘナン、クリスチアーニ

第 8 山車 「火星のサンバ——今日我々がたどり着いたところにたどり着けた人を敬え」

火星の大地で、ロボットを目覚めさせたのは、ジョルジ・アラガオン、アウミール・ギネート、ルイス・カルロスが作曲し、カシキアーナであるベッチ・カルヴァーリョが歌うサンバ「コイジーニャ・ド・パイ」だった。全てがカシーキ関係者だ。

DESTAQUE(中央・上) エヂミウソン・アラウージョ

DESTAQUE(右) ヴァレーリア・コスタ

DESTAQUE(左) ルシアーノ・ヂ・ロレート